

## 青年時代の王國維と明治學術文化

——『教育世界』雜誌をめぐって——

錢 鷗

近代中國を代表する國學者王國維（一八七七一—一九二七）と甲骨學、敦煌學、また文物・古籍收藏などの領域で名高い羅振玉（一八六六—一九四〇）の二人が、辛亥革命を避けて京都に身を寄せていた時期、京都大學を中心とした日本の東洋學者たちとしきりに往來し、それが日本、中國雙方の中國學の發展に大きく寄與したことは、よく知られている。しかし來日以前、王國維が二十代、三十代の時に、すでに當時の日本の東洋學、廣くは人文社會科學の最先端の成果に觸れ、それが王國維の自己形成にとって重要な働きをしていることは、これまで十分に検討されてはこなかった。そこでまだ眠ったままの多くの貴重な資料をここで掘り起こして、中國と日本の知られざる學術文化交流の一面を明らかにしてみたい。

まず、王國維の三一歳までの論文の掲載誌として従來の王國維研究でも扱われ、また中國最初の教育専門誌として近年の中國近代教育史研究でも言及されるようになった『教育世界』という雑誌から見ていくこととする。この雑誌は一九〇一年五月、羅振玉が上海で發刊し、毎月二回刊行され、一九〇八年一月の第一六六號までつづいた。そこに掲載された主要な論説や翻譯などは、一年ごとにまとめられて、『教育叢書』として刊行されている。『教育世界』雑誌の内容、編集など

に關しては、これまで様々な先行研究が存在し、例えば最も重要である雑誌の所藏狀況及びその内容の概観は大體明らかにされておき、また當時の編集事情もある程度分かっている。しかし雑誌における多くの未署名文章の歸屬、その内容に對する學際的な考察、學術史的な位置づけなど、多くの重要な課題が残されている。本文では、まずこれまでの先行研究を踏まえながら、雑誌の成立、編集の過程とその内容に關する事實關係を調査することに努め、それによって、王國維の學問的自己形成における重要な一段階を明らかにし、中國と日本の學術史における近代的發展の一面面に關する知見を提起したいと思う。

### 一 『教育世界』誕生の諸條件

#### 1 羅振玉と『農學報』・『東文學社』

羅振玉は晩年に書いた自傳『集蓼篇』（『羅雪堂先生全集』五編一、臺灣大通書局、一九七三）の中で、自分が維新派と如何に對立する立場にあったかを語っている。彼の思想的・政治的な立場は確かに後には維新派から離れていくのだが、日清戰爭直後の時期には、彼はやはり維新・自強の風潮に惹かれていたと考えるべきだと思われる。そのことは

彼が當時維新派グループの一人汪康年に寄せた書簡からも窺える。

竊以中國千餘年之積習、皆坐人心錮蔽、才智不出、今欲開錮閉、則興學校爲要圖、而開學校之先聲、則報館爲尤急。竊以閣下此舉實握開風氣之樞紐、爲之驚喜欲狂。比報張出、得讀偉論、暨梁卓如先生諸議、辭理并優、三長兼擅、沉痛深擊、語語中肯、奇才奇才、能毋拜服。弟流庸淮浦、錄錄無寸長、行年三十、精力半耗於經史考據之中、比來憤然有悟、已有遲暮之慨。……昨與傲友蔣伯斧參軍議中國百事皆非措大力所能爲、惟振興農學事、則中人之產、便可試行。〔汪康年師友書札〕三、上海古籍出版社、一九八七年

中國積年の弊害は、人心と才能が閉ざされおわれてきたことが原因であり、それを啓蒙するためには、學校と新聞の振興が最も急務であり、『時務報』の創刊は正にこの風氣を開く慶事であるという。また該報における汪康年、梁啓超の諸論説が、文章議論ともに優れていることに感嘆し、自分も農學を通して實業振興に力を入れたいと語る。つまり梁啓超らが唱道した「民智を啓き」「實學を興し」「書を譯し」「學會を設ける」などの變法改良運動に共感し、それまで續けてきた經學や史學などの古い學問とはまったく性格の異なる方向へ歩み出そうとしていたのである。一八九七年、羅振玉は蔣黼らとともに上海で務農社を起し、近代中國に於ける最初の農學専門誌『農學報』を創刊した。<sup>3</sup>農學書の翻譯については、『時務報』で日本語の翻譯にあたっていた古城貞吉に依頼し、藤田豊八をも翻譯のためにまもなく招聘した。<sup>4</sup>これが羅振玉と王國維にとって、日本の帝國大學の新しい漢學者グループとの、はじめての出會いであり、これが後に日中兩國の學術交流に重要な意味を持つことになる。

一八九八年二月、羅振玉、汪康年など五人が更に出資して東文學社

を上海で設立した(注4を参照)。東文學社設立の趣旨について、「東文學社社章」では、「講求歐西語言文字者實繁有徒、誠務其急也。日本同處一洲、而研習其語言文字者願寥寥焉。彼土人士位止中國、中國士夫往々不能與之通姓字。彼國書籍流傳中國、中國士夫往々不能通數行。不便孰甚」〔農學叢書〕第一集第一冊；『東亞學會雜誌』第二編第二號〕と述べられている。

日本に目を向けるのは當時の風潮であったが、その實質は、日本を通じてもっと速やかに西洋に追いつこうとするのが一般的な志向であった。しかし興味深いことに、東文學社の「社章」には、それとはやや異なる趣が示されている。つまり西洋文化を學ぶのに日本という近道を取ろうとするのではなく、「歐西の語言文字を講求する者」は多いが、「其(日本)の語言文字を研習する者は願寥寥たり」であるため、兩國の文化交流に障礙となつてゐる事態を改善しようといふのである。ここには、日本の書籍と學問を西歐文化の附屬品とするのではなく、日本の學術文化そのものに價値を認める態度が讀みとれる。東文學社のこのような日本との學術文化の交流に對する認識は、後に羅振玉によつてさらに各方面の事業に展開していく。また羅振玉が内藤湖南、狩野君山などに出會い、京都時代を経て、やがて日本學術界と生涯にわたる深い縁を結ぶことになるのもこれが出發點となつた。

## 2 東文學社における王國維の出發

一八九八年二月、二度目の郷試にも合格できず、郷里で家庭教師をして生計を立てていた王國維は、上海に行き、時務報館で書記の仕事始めた。上海に出た當時の王國維は、國を憂えて維新改良に心を寄せ、「新學」に憧れる青年の一人であった。

しかし時務報館での學問とは全く關係のない書記の仕事は面白くない、しかも給料は非常に低くて、生活も苦しいものであった。だが、科擧に失敗した貧しい讀書人にとって、専門職を見つけるのは決して簡単なことではなく、各地で遂行されている「新政」に活動の場を求めるしかなかった。彼らには理念のほかには、生活のためにも「新學」「新政」に接近する「必要性」があった。例えば、王國維の父の王乃魯の日記からもその一斑が窺える。「靜（王國維）此行（日本留學を指す）、能於明年變法、鄂督學薦人才、徵召歸來、或有事做、吾願如此」（『王乃魯日記』一九〇〇年二月九日、上海圖書館藏、未出版）。

生計と學問への意欲との板挟みの中で王國維が時務報館をやめようかと悩んでいたちょうどその時、東文學社が創立され、そこで毎日三時間の日本語學習に携わることの時務報館から許可された。そして偶然羅振玉と出会ったことが、王國維の學者としての生涯に重大な意味をもつこととなった。一八九九年の春、東文學社から翻刻出版された那珂通世の『支那通史』と桑原隲藏の『東洋史要』の序を、羅振玉の代筆として書き、これが王國維と日本近代東洋學との初めての接觸となった。一九〇〇年、庚子の變により東文學社が解散させられるまで、王國維は學社で二年半の生徒生活を送った。その頃から王國維の日本語は目に見えて進歩し、また本格的な論文、あるいは譯著はあまりないものの、後の獨學のために必要な外國語や、自然科學及び社會人文科學の基礎知識をしっかりと身につけた。

羅振玉らの『農學報』は、梁啟超、汪康年などの維新派だけではなく、張之洞、劉坤一、端方などの地方實力派官僚、並びに繆荃孫、梁鼎芬、沈曾植などの名士にわたる幅広い支持層を獲得し、その運営はかなり成功していたようである。また羅振玉は東文學社の經營によつ

て、王國維、樊炳清、沈紘などの翻譯者の人材を養成し、日本書籍を主にした大量の翻譯の経験を積んで、内外における交遊も廣げ、情報源を保有できるようにする。いうまでもなくそれらの事業は、後の『教育世界』の創刊を可能とする基礎を築くことになった。

### 3 清末の教育改革と日本モデル

『教育世界』が、中國最初の教育専門誌として、一九〇一年の時點で生まれたのは、もちろん偶然のことではない。その誕生の外的な契機を考えるために、中國の近代教育體系の樹立期を少し顧みておきたいと思う。

科擧を頂點とする傳統的教育體制を打破して、近代的教育體系を樹立するために、中國は日本と比べて遙かに長い年月を要したようである。日清戰爭より三十年ほど前から、京師同文館（一八六二）などの「新式學堂」が次第に設立された。それらはいわゆる「洋務運動」の一環として、外交や翻譯、機械や軍事技術に關する人材を養成し、急場間に合わせる目的のものであり、舊來の傳統的體制の變革をめざしたものではなかった。一八八〇年代から實學講求の傾向に應じて、各地に書院の教育内容改造の氣運も高まっていたが、その時點では、國子監—府學—州學—縣學から、地方の書院、洋務派の「新式學堂」までを一體化した全國學制の構想は、まだ登場していなかった。

日清戰爭の敗北によって、これまで西洋の軍事、工業技術などを學べば危機は免れられると考えてきた洋務派の近代化政策の破綻が、白日のもとに顯在化した。中國の富強を圖るためには單なる機械技術の導入ではなく、政治、社會、文化、教育など國家制度を全面的に改革しなければならぬ、とする變法維新運動が盛んに展開されることに

なる。すでに成功した日本の例を見ると、政治改革と表裏をなす國民教育の普及、近代學校制度の整備が、富強の根本的な力となっているとの認識を多くの人々が深めた。變法維新運動の中心人物の一人梁啓超（一八七三～一九二九）は、一八九六年に、「變法通議」（論變法不知本原之害）「論學校」（論科學）「論譯書」などを『時務報』で發表し、「變法之本、在育人才、人才之興、在開學校、學校之立、在變科學、而一切要其大成、在變官制」（論變法不知本原之害、第三冊、一八九六）、「世界之運、由亂而進於平、勝敗之原、由力而趨於智、故言自強於今日、以開民智爲第一義」（論學校一・總論、第五冊、一八九六）と、國民教育の普及という新しい視點の改革論を、「奏摺」の形で皇帝に上るのではなく、雜誌『時務報』などにおいて、國民全體に向かつて唱道していた。そして従来の教育體制を根本的に改革し、日本の近代教育制度に倣って、新教育體系の樹立をめざす教育改革運動を展開していく。

維新派の教育改革構想に對して、洋務派最後の代表的人物で、清末の教育改革を現實的に推進した張之洞（一八三七～一九〇九）は、有名な『勸學篇』（一八九八）を發表した。彼の「中體西用論」は、政治の理念において康・梁らと一線を劃するが、「益智」「遊學」「設學」「學制」「廣譯」「變法」「變科學」などの項目における改革方針は、維新派と合致するところが多い。とりわけ日本の書を譯し、日本に留學生を派遣し、日本の現行教育體制によく學ぼうといった點は共通している。

こうした教育改革の氣運に應じ、一八九八年六月からの、約百日間にわたる國政改革（戊戌變法）の中で、科舉制度の改革、京師大學堂の創設、中・小學堂の全國的普及、外國ことに日本への留學生の派遣、

外國書ことに日本書の翻譯など、教育に關する改革が行われようとしていた。

政治運動としての戊戌變法は短命であったが、ここに教育近代化の構想がやっと明らかにされて、天下の人心を大いに動かし、新教育體系の樹立への道が開かれた。一九〇一年、清朝は「興學育才、實爲當今急務」（大清德宗景皇帝實錄）四九一、光緒二十七年二月」と、章程法規の制定を命じている。諸外國、ことに日本の制度を参照するために、日本書の翻譯及び日本への留學生派遣とともに、日本に赴いて實地教育視察を行うことも盛んになっていた。それらの日本教育視察官たちは歸國後多くの視察報告を書いたが、そのほとんどは日本の教育體制を絶賛したものであった。例えば、姚錫光『東瀛學校學概』（一九〇九）、李宗堂『考察日本學校記』（一九〇二）、羅振玉『扶桑兩月記』（同右）、吳汝綸『東遊叢錄』（同右）などがそれである。これらの視察官たちが書いた視察報告は、いうまでもなく當時の清政府及び地方官層の近代教育觀念に影響を與えたに違いない。一九〇二年に「欽定學堂章程」、一九〇四年には「奏定學堂章程」が發布され、一九〇五年、北京に學部が設立された。これらの諸章程及び體制の制定には、やはり諸外國、ことに日本の制度が大いに参照されたのである。

『教育世界』雜誌の發刊は、正に以上のような清末の教育近代化運動の最高潮期に應じたものにほかならない。

## 二 『教育世界』の編集と内容

### 1 羅振玉の編集時代

羅振玉が張之洞の招聘に應じて武昌農務局の附屬農學堂に行った時、東文學社の學生であった王國維、樊炳清らの翻譯の協力を得て、

一九〇一年五月に私費で『教育世界』を創刊したと羅振玉は述べている(『集蓼篇』)。初めの三年間、羅振玉は自ら雑誌の編集にあたりながら、張之洞の江楚編譯局、盛宣懷の南洋公學、岑春煊の教育顧問、端方の江蘇師範學堂などの職につき、教育改革の實踐も精力的に行つていった。『教育世界』の創刊にあたって、その編集方針を、「爰に最近の學說書籍を取り、編譯して冊を成す」(『教育世界序例』、一九〇一年五月、『教育叢書』第一集)と羅振玉は述べている。彼の編集方針は、教育に關する世界各國の新しい學說、とりわけ明治日本の教育制度及び教育學教科書を翻譯、紹介しようとするものであった。一九〇一年五月の創刊號から一九〇四年二月の第六八號までは、羅振玉が自ら編集にあたり、その内容は「文篇」と「譯篇」との二大部分に分けられる。

「文篇」には、「論說及び編著の書を以て見示す者あらば、選擇して刊行すべし」(同上)として、主に教育に關する論說、上奏文、教育狀況調査報告などを掲載する。羅振玉自らも「教育私議」「教育五要」「教育警言八則」「日本教育大旨」など多くの論說を執筆している。「譯篇」には、「附譯の書は、約六類と爲す、曰く各學科規則、曰く各學校法令、曰く教育學、曰く學校管理法、曰く學級教授法、曰く各種教科書」として、教育の方針、制度、法規から教科書、教育學などの部門にわたつて壓倒的な比重で日本明治期の教育事情を紹介しようとした。だが、明治日本の教育思想、學說に對する紹介は、決して「全般的」ではなかった。例えば、近代日本の教育と學問の啓蒙書としてこの上なく有名な福澤諭吉の『學問のすすめ』(一八七二—七三)は最も早く紹介されるべき書だが、残念ながら、清朝の體制においても羅振玉の思想においても、それを受容するには至らなかった。教育家としての福澤の傳記は載っているが、皮肉にもそこに思想家としての福澤諭吉像

は、全く描かれていない。羅振玉編集時代の『教育世界』には、明治中後期の教育體制及びその體制と思想的に一致する教育理論と學說の紹介が集中している。

## 2 王國維の編集時代

一九〇〇年に東文學社が解散してから、王國維は半年ほどの短い日本留學をはさんで、『農學報』後には『教育世界』の翻譯・編集を務めていた。一九〇三年からは、通州師範學堂、江蘇師範學堂の教職に就きながら、よく知られているように、特にカント、ショウペンハウエルの哲學に没頭していった。一九〇四年には羅振玉に代わつて『教育世界』の事實上の編集責任者になっている。これを契機に、『教育世界』は一九〇四年二月の第六九號から、内容、項目、外觀など、全面的に改革を行う。欄目には、肖像、論說、學理、教授訓練、學制、傳記、小説、叢談、本國學事、外國學事、雜錄、來稿、文牘などを増設した。内容の面では、三つの點が注意をひく。第一に、以前は教育法令、制度、規則、教育學教科書などの實用的な翻譯を中心としていたのが、哲學、心理學、倫理學、論理學など純粹な學術書の翻譯に轉換し、日本の教育事情と教育學書に限らず、古今の西洋の教育思想、教育理論、哲學、心理學、倫理學、論理學、美學、文學などを廣く紹介するようになったこと。その中でもとりわけ哲學の重視が目を引く。第二に、外國の學術書の翻譯を重んじると同時に、編集者自身が執筆した論說、論文が大いに増えたこと。總じていえば、すでに指摘されているように、王國維の學問的な興味に従つて、本來の教育専門誌から総合的な人文科學雜誌に變貌したことである。第三に、文章が未署名で發表されるようになったのも、王國維が編集權を握つてからの新

傾向である。

### 3 『教育世界』の性格變化

清末の教育近代化を全體的に検討するのは、紙幅の制約もあるので割愛し、ここでは教育理念に關する張之洞、羅振玉及び王國維の立場を比較してみたい。

清政府に教育改革論の模範とされた張之洞の『勸學篇』には、知識構造の改革を中心に論じた「益智」「遊學」「設學」「廣譯」「變科學」などの篇が設けられている。表面的に見れば、これは康・梁及び羅・王と共通しようが、その「智」とは、「學」とは、を問いつめていけば、彼らの基本理念には大きな違いが現れる。『勸學篇』における「智」とは、決して國民全體を含めた人間精神の覺醒を意味しているのではなく、張は個人としての人間の向上を目的としていたわけではなかった。だから『勸學篇』において、「同心」「教忠」「明綱」などは「本」として「内篇」に收められているが、「益智」「遊學」「設學」などはすべて「末」として「外篇」に收められている。つまり張にとって、教育とは根本的に農工商兵の諸分野と同じく、國の富強をはかるための一手段、「用」にすぎないのである。これはまた「有用の書」を多く譯し、それを實踐に移す「廣譯」(廣く翻譯すること)の基本方針と表裏の關係にある。彼は「舊學を體と爲し、西學を用と爲す」と強調しつづけた。一九〇四年に、中國に於ける近代的學制『奏定學堂章程』が張之洞らの手によって完成された。その教育の主旨は「趨向を端正にして、通才を造就するを以て宗旨と爲す」として、「尊親の義を以て彼を曉し、規矩の中に彼を納む、一切の邪說詖詞を嚴拒して力めて強く斥け、學生を他日に成就せしむれば、士爲り、農爲り、

工爲り、商爲るに論無く、均しく上は國を愛するを知り、下は身を立つるに足り、始めて朝廷興學の意に負かず」と方針を規定した。一九〇六年、「教育宗旨」が發布され、そこには「忠君」「尊孔」「尙公」「尙武」「尙實」として、日本明治中後期の國家主義教育思想の受容が織り込まれた。つまり清政府による教育の改革は、近代的な體制、知識を攝取することによって、絶對君主の專制體制、傳統的國家政治倫理が代表する舊秩序と理念を永久に存続させようとするものであった。その意味で、日本の「教育勅語」以來の「忠君愛國」の教育方針、國家至上主義の學校管理體制は、この上なく理想的なものであったらう。

羅振玉の教育改革の發想は、ほぼ以上に述べた清末國家教育思想と合致していると思われる。一九〇一年、『教育世界』を發刊してまもなく、羅振玉は、湖廣總督張之洞らによって日本に派遣され、日本の教育事情の視察、教育關係圖書の收集を依頼された。羅振玉は日本にいた二か月のあいだに、各種の學校を視察したほか、嘉納治五郎、伊澤修二、杉浦重剛など當時日本の教育界で活躍していた人物達と會い、教育ひいては政治に關する意見を交換して大いに共鳴をえたといふ。日本から歸つてまもなく書いた「日本教育大旨」の中で、

其教育方針在令全國人民悉受學、備具普通知識與國民資格也、  
：有道德與國民之基礎而後知尊愛之方、有知識與技能而後得資生之具、(『教育世界』第二十三號、一九〇二年四月)

と、日本の教育方針を「一般的知識」(厚生目的)と「國民としての資格」(現有體制と社會秩序に對する自覺性)の養成として理解した。そして彼は同年に書いた「教育贅言八則」の中で、それに共鳴する見解を示した。

義務教育者、令通國人民知各盡國民之義務、……若不施義務教育、則國人不知國與民之關係、則愛國之心何由而生、……今日立學、必定義務教育主義、必使全國人民悉受普通之教育、悉具尊愛之知識、教育之方針不誤而後乃能逐漸進歩以企完全、(『教育世界』第二十一號、一九〇二年三月)

このように、教育の根本理念においては、羅振玉は張之洞らの延長線上に位置するとすべきであろう。羅振玉編集時代の『教育世界』には、彼のこうした教育思想が徹底している。かく見てくると、羅振玉は中國の教育近代化をはかるために日本の教育制度をモデルにし、日本の教育思想を全般的に受容したと想像されるかも知れない。しかし明治教育の全貌を考えると、羅振玉も含めた清末の教育改革家は、學校制度、一部分の教材、「忠君愛國」を根據とする「教育勸語」の教條など、表面だけに注目して「近代化」を推進しようとしていたにすぎず、明治教育の受容ひいては教育近代化の理念に關する追究は、到底深いところには達していなかった。例えば、あれほど日本教育體制に傾倒して「全面的に」模倣しようとしたのに、なぜ福澤諭吉の『學問のすすめ』をはじめとする多くの日本の重要な近代教育啓蒙著作は『教育世界』から疎外されていたのか。それについては、羅振玉あるいは中國近代教育改革の問題だけではなく、中國文化の構造的な問題を問わなければならないであろう。(これは重大な問題であるため、今後の研究でさらに深めていきたいと思う)

その問いを同時代の中國においてはじめて發した人は、王國維である。それは『教育世界』に載せた王國維の生涯最初の論文「哲學辨惑」(第六十六號、一九〇三年八月)からはじまる。その冒頭で王國維は、「甚しいかな、名の以て正ざるべからざるや、去歲の南皮尙書(張之

洞)の學務を述べし摺、及び管學大臣張尙書(按、張百熙)の復奏の摺を觀るに、一は哲學の流弊有るを恐れ、一は名學を以て哲學に易う。ここに於いて海内の土は頗る哲學を以て詬病と爲す者有り」と述べる。そして「哲學は有害の學に非ず」「哲學は無益の學に非ず」として、「中國現時哲學を研究するの必要」「哲學は中國固有の學爲り」「西洋哲學を研究するの必要」を主張して、張之洞などと鋭く對立して哲學の意義を明らかにしようとすると同時に、次のように哲學と教育との關係の視點から、教育の根本目的を論じる。

尤可異者、則我國上下、日々言教育、而不喜言哲學、……今夫人之心意、有知力、有意志、有感情、此三者之理想、曰眞曰善曰美、哲學實總合此三者而論其原理者也、教育之宗旨亦不外造就眞善美之人物、故謂教育學上之理想即哲學上之理想、無不可也、(同上)

このような思考は、同年同月の「論教育之宗旨」の中で

教育之宗旨何在、在使人爲完全之人物而已、……完全之人物不可不備眞美善之三德、欲達此理想、於是教育之事起、(『教育世界』第五十六號、一九〇三年八月)

と、さらに深められていく。教育の宗旨は「眞善美」の「完全之人物」を育成するためとするところは、張之洞、羅振玉らとまったく異質な思考と世界觀を示しているだろう。教育は張之洞、羅振玉らにとっては、國家に有用な人間を作るという目的意識の明確な事業であった、それ自體が價值をもつ學問とは見なされていない。それに對して王國維にとっては、教育は一つの學問分野であるにとどまらず、人間の精神・文明のすべてに關わる營みだったのである。それと同じ時期に、彼は『教育世界』で「孔子之美育主義」「教育偶感」「論叔本華之哲學及其教育學說」(以上一九〇四年)；「論近年之學術界」「論新學

語之輸入」、「論平凡之教育主義」（以上一九〇六年）；「去毒篇」（一九〇六年）、「人間嗜好之研究」（一九〇七年）など一連の論説を發表し、近代中國に於ける工業・技術の革新、政治・社會や學校教育の改革などさまざまな主題に關して、主に中國的な思惟形式の改造と大衆の精神的啓蒙を圖ろうとした。彼は一時一國の利害關係を超えた教育、そして西洋の學問を考えていたのである。そうした思考は當時において、當然當局の意圖とは遠いものとなるが、青年時代の王國維は決して自分の理念を簡單に放棄しはしなかつた。

例えば、清朝教育近代化の綱領として、張之洞らの手で制定された「奏定學堂章程」では、「經學科大學」と「文學科大學」の教授科目の中に哲學科目が立てられていないことに對して、王國維は以前『教育世界』に發表した「哲學辨惑」の主旨を更に發展させて「奏定經學科大學文學科大學章程書後」(『教育世界』第一一八號、一九〇六年二月)を書き、張之洞の「根本之大謬」を手厳しく批判した。その中で王國維はまず「知識の最高の満足は、必ずこれを哲學に求む」、「哲學の價值有る所以の者は、正に其の利用の範圍を超出するを以ての故なり」と、哲學の價值を明らかにし、そして西洋哲學と中國固有の學問との關係を論じて、「異日、我國の學術を發明光大する者は、必ず世界の學術に兼通するの人、一孔の陋儒に在らざること固より決す可きなり」と説き、もしこの根本の謬誤を改めないなら、わが國の學術の將來はないと主張した。王國維は教育の問題にとどまらず、人間を人間たらしめる道德、物質生活と精神生活、學問研究と社會功利などについて、傳統的價值體系を超えた次元で檢證を試みようとした。彼にとつて、おそらく清末に盛んであつた教育改革の思想と方針は、全く教育の根本に觸れるものでなかつたのであろう。

#### 青年時代の王國維と明治學術文化

『奏定學堂章程』の「學務綱要」には「外國學堂には宗教の一門有り、中國の經書は、即ち是れ中國の宗教なり」とされ、また『教育世界』に載せられた羅振玉の「學制私議」(第二十四號、一九〇二年四月)にも、「儒教主義を守り、學をして教と合一せしむ」とされている。ところが、王國維は「我が孔・孟の説の若きは、則ち固より宗教に非ずして學說なり、一切の他學と與に均しく以て研究して益々明らかなり」(同上)と反對論を唱え、經學科大學を文學科大學に併合すべきだと主張する。そして經學獨尊の局面を打破して、哲學概論、歴史哲學、中國・西洋の哲學史から美學、心理學、比較言語學、比較神話學など、世界最新の學問分野も取り入れた、新しい文學科大學の授業科目表を作つた。これは「奏定學堂章程」などを遙かに超えた、當時の中國の新しい學問の最高水準を代表するものであろう。王國維の「學教合一」に對する反對は、清政府の教育近代化の根本理念及びその方策のモデルとされる明治「教育勅語」體制に對する否定であつて、彼が「經學科大學」の必要性を否定したことは、即ち中國の傳統教育思想に對する徹底的挑戦であつた。王國維の西洋の學問ことに哲學に對する興味、翻譯活動、そして傳統的思惟を超えようとする姿勢は、普遍的眞理を世界のより廣大な背景において檢證しようとするものである。一九一三年以後になると、彼は哲學・文學の研究を斷つてしまふが、こうした基本姿勢は以後もあらゆる學問研究の中に浸透して、生涯徹底していた。

しかしここで、王國維のこうした教育思想は、決してただ彼個人の蓄積のみによつて發したのではないことを忘れてはならない。王國維は最初の學術論説「哲學辨惑」(『論教育之宗旨』(一九〇三年))を發表する直前に、立花銃三郎講述の『教育學』(一九〇一年)、牧瀨五一郎の



『教育學教科書』、桑木嚴翼の『哲學概論』、元良勇次郎の『心理學』、『倫理學』(以上一九〇二年)などを翻譯していた。それは王國維の前記の二つの論說に重要なヒントを與えたに違いない。例えば、哲學の必要性について、桑木嚴翼の『哲學概論』(一九〇〇)で次のように論じた箇所がある。

哲學の必要を疑ふ者は曰く、吾人は哲學なくして生活するを得、然るに生活に缺くべからざるものに非ざれば凡て無用なるが故に、哲學は無用の學なりと、然れどもここに先づ質さざるべからざるは、生活及無用の意義なり。抑も生活とは、單に飲食起臥するの謂か、呱呱の聲を發して生を享けてより老衰枯落するに至るまでの生理作用を云ふに過ぎざるか、……然れども此意義に於ては單に哲學のみが無用なるに非ずして、一切の學術研究は悉皆無用といはざるべからず。(第三章第八節「哲學の需要」、早稻田大學出版部大正一一年三月の縮刷による)

それと同じ趣旨を、王國維も「哲學辨惑」の中で次のように述べ

夫彼所謂無益者、豈不以哲學之於人生日用之生活無關係乎、夫但就人生日用之生活言、則豈徒哲學爲無益、物理學、化學、博物學、凡所謂純粹科學、皆與吾人日用之生活無絲毫之關係、其有實用於人者、不過醫、工、農等學而已、然人之所以爲人者、豈徒飲食男女、芸芸以生、厭厭以死云爾哉、

また、「完全之人物」を育成するという教育の根本理念について、『教育世界』に翻譯された立花統三郎の『教育學』は次のように言う。

教育之宗旨何在、但以教育子弟爲宗旨乎、抑以社會一切爲宗旨乎、此當研究之最大問題也、以子弟爲宗旨者、單使子弟爲完全之人、

他不必須之義也、……若以適於社會全體之方便而謂之完全、此非眞完全、乃相對的完全也、……社會之發達者、豈有單使社會發達而使一人爲之奴隸之理乎、(第九號、一九〇一年九月)

即ち教育は單に國や社會の發達を目的とすべきではなく、個人の自覺、個人の自由を強調した人間性そのものの完成を宗旨と見なすべきである。立花統三郎をしてことに桑木嚴翼の書には、西歐のカント學派の哲學及び人文主義教育思想を織り込んでいると思われるが、それぞれの専門に關しては當時の日本の最高水準の蓄積を代表するものであつて、内容と論理において一定の體系を持つものである。

以上からもその一斑を窺えるように、明治期日本の教育界、思想界はいうまでもなく甚だ多様な様相を呈して、決して國家主義で概括できるような單純なものではなかつた。王國維は日本書の翻譯、日本學術の蓄積を消化していく中で獨自の選擇を行い、それによつて自分の學術世界を廣げていった。そうした中で、日本の「教育勸語」體制、國家主義至上の教育方針を取り入れようとする清朝の教育主旨に對する鋭い批判が生じたのである。同時代の日本の學術・思想の受容に關して、青年時代の王國維が羅振玉と一線を畫したことが明らかである。二人の姿勢はこのように基本的に異なつていたから、前期と後期の『教育世界』における性格の變化も怪しむに足りない。ただ王國維のこうした姿勢は、當時の中國に於いては甚だ孤獨な存在だったといわざるを得ない。

### 三 『教育世界』の未署名文章

#### 1 未署名の文章の所屬

近年の王國維研究では、『教育世界』の未署名の文章に對する検討

が盛んになり、陳鴻祥氏『王國維與近代東西方學人』（天津古籍出版社、一九九〇）、『王國維年譜』（齊魯書社、一九九一）や、佛羅氏『王國維哲學美學論文輯佚』（華東師範大學出版社、一九九三）などによって、王國維の作と推定されたものは三十九點ほどにのぼる。美學、教育學、文學關係のものもあるが、西洋哲學と中國哲學關係のものが最も多い。それらの未署名の文章を王國維のものと推定する根據として、佛羅氏は九つの理由をあげている（前掲書「序言」）が、その中で説得力を持つ理由をまとめれば、未署名の文章の内容と當時の王國維の讀書や研究の内容とが大いに關連しているということ、のみならず、彼がその時期に書いた署名論文の觀點、表現と一致するところもあるということである。

陳鴻祥氏はその中の一二篇の論文については、原據とした外國の著作が存在し、王國維が翻譯あるいは改作したのであるかと推測しているが、その他の大部分については佛羅氏と同じように、王國維自身が書いたものと考えている。

しかしながら私がこれまで調べたところによると、これらの未署名の文章の多くは、實はもとになる書物が確かに存在するのである。もとのなる書物に基づいてコメントを加えたり、縮小したりしたものもあるが、ほとんど忠實な翻譯といつて差し支えないものも少なくない。まず陳鴻祥氏、佛羅氏によって王國維が原著者だと推定されている三十九篇の未署名の文章と、私の調査によって確認できた種本の存するもの（★印のついたもの）のリストを一覽しておきたい。

- 1 德國文豪格代希爾列爾合傳（第七〇號、一九〇四年三月）
- 2 尼采氏之教育觀（第七一號、一九〇四年三月）
- ★3 漢德之哲學說（第七四號、一九〇四年五月）——キンデルバンド原

青年時代の王國維と明治學術文化

著、桑木嚴翼抄譯『哲學史要』第六編第一章「カントの理性批判」、早稻田大學出版社藏版、明治三五年（大谷大學藏）

- 4 漢德之事實及其著書（同上）
- ★5 漢德之知識論（同上）——同上第三十八節「認識の對象」
- ★6 德國文化大改革家尼采傳（第七六號、一九〇四年六月）——桑木嚴翼『ニーチエ氏倫理說一斑』、増補改訂『倫理學書解說』第十五、育成會、明治三八年、初版明治三三年（京都大學藏）
- ★7 希臘大哲學家雅里大德勒傳（第七七號、一九〇四年六月）——中島力造編『列傳體西洋哲學小史』第一編第四章第三節、富山房、明治三一年（京都大學藏）
- 8 近代英國哲學家斯賓塞傳（第七九號、一九〇四年七月）
- 9 格代之家庭（第八〇、八二號、一九〇四年八、九月）
- ★10 德國哲學家叔本華傳（第八四號、一九〇四年十月）——同上第五編第四章第二節、
- 11 希臘聖人蘇格拉底傳（第八八號、一九〇四年二月）
- 12 希臘大哲學家柏拉圖傳（第八九號、一九〇四年二月）
- 13 英國教育大家洛克傳（同上）
- 14 法國教育大家盧騷傳（同上）
- 15 脫爾斯泰伯爵之近世科學評（同上）
- ★16 子思之學說（第一〇四號、一九〇五年七月）——遠藤隆吉『支那哲學史』、金港堂書籍、明治三三年（大谷大學藏）
- ★17 孟子之學說（同上）——同上
- ★18 荀子之學說（同上）——同上
- ★19 哥羅宰氏之遊戲論（第一〇四、一〇六、一一〇、一一五、一一六號、一九〇五年七月、一九〇六年一月）——菊池俊諦『コロッツア氏遊

- 戲論之心理及教育』、増補改訂『教育學解説書』、育成會、明治三九年、初版明治三三三（京都大學藏）
- 20 教育家之希爾列爾（第一一八號、一九〇六年二月）
- ★21 英國哲學大家休蒙傳（同上）——中島力造編『列傳體西洋哲學小史』第三編第一章第三節
- 22 英國哲學大家霍布士傳（第一一九號、一九〇六年二月）
- ★23 德國哲學大家漢德傳（第二二〇號、一九〇六年三月）——同上第五編第二章
- 24 墨子之學說（第二二二號、一九〇六年三月）
- 25 老子之學說（第二二二號、一九〇六年四月）
- ★26 荷蘭哲學大家斯披洛若傳（同上）——同上第四編第一章第三節
- 27 漢德之倫理學及宗教論（第二二三號、一九〇六年四月）
- 28 述近世教育思想與哲學之關係（第二二八、二二九號、一九〇六年七月）
- 29 孟子之倫理思想一斑（第二三〇號、一九〇六年八月）
- 30 列子之學說（第二三一、二三二號、一九〇六年八月、九月）
- 31 周濂溪之哲學說（第二三三號、一九〇六年九月）
- 32 脫爾斯泰傳（第一四三、一四四號、一九〇七年二月、三月）
- 33 戲曲大家海別爾（第一四五、一四七、一四八號、一九〇七年三月、四月、五月）
- 34 英國小說家斯提達孫傳（第一四九、一五〇號、一九〇七年五月、六月）
- 35 霍恩氏之美育說（第一五一號、一九〇七年六月）
- 36 莎士比（亞）傳（第一五九號、一九〇七年一月）
- 37 倍根小傳（第一六〇號、一九〇七年一月）
- ★38 孔子之學說（第一六一、一六五號、一九〇七年一月、一九〇八年一月）

月）——松村正一「孔子之學說」『東洋哲學』第八編第九號、十二號、明治三四年、後に單行本

39 英國大詩人白衣龍小傳（第一六二號、一九〇七年一月）

これらの中には「孔子之學說」「孟子之倫理思想一斑」、「漢德之哲學說」「漢德之知識論」及び「哥羅宰氏之遊戲論」などかなり長く、内容も濃い著作も含まれている。しかも陳鴻祥氏と佛羅氏が王國維の逸文として非常に重視している「漢德之哲學說」「漢德之知識論」「哥羅宰氏之遊戲論」「孔子之學說」は、日本語原本の忠實な翻譯と云つてよいものである。比較のために、次に中國哲學と西洋哲學それぞれに關する文章一例ずつを擧げておく。

王國維の著と斷定されている未署名の「孔子之學說」敍論の冒頭には、次のようにある。

倫理學者。就人之行爲。以研究道德之觀念道德之判斷等之一學科也。爲人間立標準。定價值。命令之。禁止之。以求意志之軌範。

以知人間究竟之目的。即如何而可至最善之域是也。そして種本の松村正一「孔子之學說」敍論の同じ個所には、次のようにある。

倫理學は人間行爲に就き、道德の觀念、道德の判斷等を研究する一科學にして、標準を立て、價值を定め、命令的に、禁止的に規定し、又意志の軌範を求め、人間究竟の目的、即ち如何にせば完全なる理想の域に到達すべきかを知るにあり、

また、「漢德之哲學說」の冒頭と桑木嚴毅譯「哲學史要」を同様に對比させてみると——

凱尼斯堡之大哲人漢德 Immanuel Kant 之位置。所以超絶於衆者。在其包容啓蒙期哲學。（謂十八世紀之哲學）之思想。而又加以

哲學之新問題及新方法也。彼夙修伏爾夫 Wolff 之形而上學。及德國之通俗哲學。又潛心於休蒙 Hume 之經驗論。盧騷 Rousseau 之自然論。此外如奈端 Newton 之自然哲學。英國心理學中之人之知意之分析論。法國啓蒙期之自由論。及自托蘭 Toland 至福祿特爾 Voltaire 之理神論。此皆啓蒙期哲學之最著者。而各占漢德思想之一部分者也。

此ケーニヒスベルクの大哲人の地位は啓蒙期の思想を併せ之を補充に新問題を以てせるに在り。彼はラルフの形而上學を修め、獨逸通俗哲學に通じ、然も思をヒュームの疑問に潛め、ルソーの教説を喜べり、其他ニュートンの物理學、英國文學の心意分析、理神論及自由説等は皆細心にして然も俗に陥るらざるカント思想の一端を成せり。

以上から窺えるように、これらの未署名の文章にこのような種本があるとする、近年の王國維研究の如く、これらを一概に王氏の作と斷定することはできない。もちろん種本の翻譯や書きかえは王國維自身が筆をとったものも混ざっているだろうが、他の中國人や日本人の手になる可能性も考えられる『教育世界』に日本人が中譯した例が少なくない。翻譯は誰の手になるか、現時点においては斷言できないが、少なくとも明らかにすることは、未署名の文章にはもとになる日本語の書が確かに存在しており、したがって王國維の創作とは絶対に言えないといふことである。

## 2 種本と同時代の日本學術界

種本の中で西洋哲學、教育學、また中國哲學などの書物は、ほとんど

青年時代の王國維と明治學術文化

ど明治三十年以後の、帝國大學の出身者を中心としたグループのものばかりである。明治の思想・哲學界は甚だ多様で、ここでは大まかに次の三つの流れを整理するにとどめたい。一つは明治初期の西周、福澤諭吉など啓蒙思想家による西洋哲學・思想の紹介という流れ。二つめは井上哲次郎らの西洋哲學を學んで東西思想の融合を圖りながらも、なお儒教を國民の倫理的支柱としてとらえる立場。明治政府及び井上哲次郎など帝國大學の博士グループの援護によって、儒教イデオロギーは近代國家主義思想と融合しつつ、明治の十年代から二十年代にかけて、大きな勢力を得るようになった。三つめの流れは、同じ帝大の出身ではあるが、「漢學科」ではなく「哲學科」のグループを中心として、明治三十年前後から西洋の純正哲學、教育學、心理學、倫理學などを純粹な學問として研究する方法である。

例えば、明治二十八年に出た金子馬治の『哲學綱要』、大西祝の『西洋哲學史』、松本文三郎の『ショーペンハーワー哲學提要』、明治三十一年に出た中島力造の『列傳體西洋哲學小史』、三十二年に出た蟹江義丸の『西洋哲學史』、三十三年に出た育成會の倫理學、心理學、教育學の三解説書、三十四年に出た波多野精一の『西洋哲學史要』、そして三十五年の桑木嚴翼の『哲學史要』などである。彼らは、西洋哲學の研究を本格的にはじめる一方で、東洋研究の刷新も企て、従来の儒學を中心とした漢學を學術としての中國哲學へと脱皮させていった。彼らがめざしたのは、まず純粹な學問的立場に基づき、儒教を「教」の地位からおろして、一つの「學說」へと轉換させることであった。つまり西洋哲學を参照しながら、儒教を含めた中國思想を「哲學」という學問の對象として體系化しようとしたのである。その成果は、主に明治二十七年創刊の『東洋哲學』及び明治三十年前後からの『哲學雜

誌』に反映されている。また明治三十一年に出た松本文三郎の『支那哲學史』（東京專門學校藏版）、三十三年の遠藤隆吉『支那哲學史』（金港堂書齋）、宇野哲人『二程子の哲學』（集文閣哲學叢書）、三十四年の高瀬武次郎『支那哲學史稿本』など一連の支那哲學研究に結實し、後の中國哲學研究、いな、東洋學研究全體の基本的な方向及び方法を開拓した。

『教育世界』が未署名で紹介した文章は、以上のような第三の流れに屬するもので、決して行き当たりばったりに外國の新しい論文を載せたわけではなかった。その第三の流れによる西洋哲學、中國哲學の研究は、日本國內のみならず、中國の近代的學問の展開に對しても非常に重要な啓示を與えた。例えば、先に言及した「奏定經學科大學文學科大學章程書後」をめぐって、王國維が張之洞、羅振玉らと意見を異にしたのは、正に彼が傳統的な經學を「教」の地位からおろして、一つの學問分野へと轉換させようとした點にある。彼は當時の日本の中國哲學研究者のように、西洋哲學をモデルにした中國哲學の體系化を圖るには至っていなかったが、やはり西洋哲學を意識しながら、傳統經學を含めた古今の中國思想を世界の學問と並列してとらえ、多くの前例のない重要な知見を示した。一つの時期を劃した先進的な見解に違いないであろう。

當時の中國では、嚴復をはじめとして、梁啓超、章炳麟なども西洋の哲學・思想に接觸し、かつ翻譯紹介を行っていた。しかし學問そのものを究極の目的として純正哲學に専念する姿勢は、やはり王國維以外には見當たらぬ。また當時の『譯書公會報』（一八九七）『譯書匯編』（一九〇〇）『翻譯世界』（一九〇二）『東方雜誌』（一九〇四）など多くの新聞雜誌や、出版界も日本書の翻譯を重んじていたが、政治、經

濟、法律、社會、自然科學など實用的な分野に偏り、哲學は最も比重の軽いものであった。そういった中で王國維が正に哲學から出發しようとしたのは、特徴的である。それゆえ『教育世界』ほど明治三十年代の日本の最も純粹な學問成果を紹介したものは、量的に見ても、質的に見ても、當時の中國においては、ほかに例のない存在といえよう。この時期の王國維には、日本の學術・思想を直接に論じた文章はあまりないものの、日本の學術研究の精神を取り入れて、自己の學術的觀點と研究方法の涵養に生かしたのである。彼は明治の學術から思想的なものよりも、思惟方式に關する成果を大いに吸収していたのではないかと思われる。これは中國近代、廣くは東洋の近代的思惟構造に關わる重要な問題であり、今後の課題として引き續き研究を進めたいと思う。

最近の中國の學界は、『教育世界』の未署名の文章を王國維の創作と見なすことによつて、王國維をカント、シウベンハワーなどの哲學や、廣くは教育學、心理學、倫理學など西洋の近代人文科學を初めて中國に導入し、中國思想を哲學として近代的な研究を行うようになった最初の人として、極めて高い評價を與えようとしている（例えば、前記の佛氏や陳氏の著作において）。しかしこれまで述べたように、未署名の文章の多くは實は王國維の創作ではなく、日本語の種本が存在することが明らかである。『教育世界』の未署名の文章は、同時期の王國維の署名論文との間にも様々な關係をもつてはいようが、同じ『教育世界』から集められた『靜庵文集』に未署名の文章が收められていないことは、やはり王國維自身が翻譯・紹介の類と創作の諸論とを區別しようとしていた事實を示している。中國の近代人文科學研究史において、王國維に高い評價を與えることは當然だが、彼の學問の

成長がこのような一段階を経ていることは、日中學術交流史上の重要な史實としても無視できないと思われる。このことよって、王國維の價值が下がるわけではない。むしろ王國維は同時代の日本の學術の最も優れた部分を正確にとらえ、吸収し、またそれを中國に積極的に紹介した最初の人として、大いにたたえるべきではないだろうか。

これまで述べてきたことからわかるように、王國維が日本の學術思想界から深い影響を受けていたことは確實である。二十代の王國維が自己形成をしていくにあたって、日本の學術成果は極めて大きな作用を果たしていた。彼は後に國學に新しい領域を切り開いていくが、その出發點では、日本の學術から多大の感化を受けていたといえる。彼が後に日本において日中の學術交流に輝かしい成果を繰り広げたことはよく知られているが、それよりずっと早い時期に日本の學術界と重要な接觸をしていたことの具體的實態がここに明らかになった。このことは今後の王國維研究、日中學術交流史研究において重要な意味をもつと思われる。以上のような事實關係を明らかにした上で、今後更に王國維と同時代の中國また明治日本の學術の比較研究を進めていきたい。

### 注

(1) 『教育世界』雜誌原本の一部分は北京圖書館、上海圖書館、北京大學圖書館、吉林大學圖書館などに藏されている。日本では、原本は一部分を除いてほとんど見られないが、『教育叢書』は京都大學人文科學研究所に藏されている。日本國內の所藏狀況については、注(2)の須川照一・伊藤淑平兩氏の論文に詳しい紹介がある。

(2) 『教育世界』雜誌に關しては、日本では早く六十年代からも須川照一氏の「靜庵文集解題」(『中國近代思想史研究會會報』九、十、十一、一

青年時代の王國維と明治學術文化

九六十年十月(十二月)、伊藤淑平氏の「王國維の「紅樓夢評論」と雜誌「教育世界」について—その書誌的覺書—」(『清末文學言語研究會會報』1、一九六二)、須川氏の「上海時代」の藤田劍峯・王國維雜記」(『東方學』第六十六輯、一九八三)などの王國維研究の中で取り組まれており、中國では九十年代から陳鴻祥氏の『王國維與近代東西方學人』(天津古籍出版社、一九九〇)、『王國維年譜』(齊魯書社、一九九一)がある。また中國近代教育史研究において、筆者の所見によると、中國では上海圖書館編『中國近代期刊篇目匯錄』第二卷上(上海人民出版社、一九七九)を嚆矢として、陳學恂主編『中國近代教育大事記』(上海教育出版社、一九八一)、璩鑫圭、唐良炎二氏編『中國近代教育史資料匯編・學制演變』(上海教育出版社、一九九一)があり、日本では林友春氏「清末中國における教育の近代化と日本」(學習院大學東洋文化研究所『調査研究報告』NO・14、一九八二)、阿部洋氏「中國の近代教育と明治日本」(福村出版社、一九九〇)がある。

(3) 『農學報』出版の經緯に關しては主に羅振玉著『集蓼篇』、上海圖書館編『汪康年師友書札』(上海古籍出版社、一九八六年)、史和等編『中國近代報刊名錄』(福建人民出版社、一九九一)などを参照。

(4) 古城貞吉、藤田豊八に關する事跡は羅振玉『集蓼篇』、「日本台北大學教授文學博士藤田君墓表」(『羅雪堂先生全集』初編四)、『汪康年師友書札』(同右)、「支那文學史再版例言」(古城貞吉『支那文學史』、一九〇二)、「肖像」日本文學士藤田豊八君(『教育世界』第七〇號、一九〇四)などによる。

(5) 主に吳澤氏主編『王國維全集・書信』(中華書局、一九八四)；『王乃譽日記』(上海圖書館藏、線裝手寫本、未出版)；王國維「三十自序」(『靜庵文集續編』)による。

(6) 張之洞の汪康年宛の書簡；『農學會請附錢名、謹捐助銀元五百元、已交匯號』(『汪康年師友書札』二)；繆荃孫日記；『接農務報第二期並將伯

斧、羅叔蘊信」(丁酉五月十四)、「接農學報二十五、六、七期並將、羅兩君信」(戊戌閏月朔)、『藝風老人日記』三、北京大學出版社、一九八〇；一九〇四年江蘇巡撫端方は學農社の刊行した農學書籍を皇帝に進呈した(『端忠敏公奏稿』卷四)「進呈農學書籍摺」；「所印農書、亦未請文藝(張之洞)扎發、而銷行甚暢、所得利益、除償本金及維持農館、東文學社外、尙贏數千圓……」(羅振玉「集蓼編」)

- (7) 清末の教育改革と日本モデルに關しは、『近代中國教育史資料・清末編』(多賀秋五郎編、日本學術振興會、一九七二)；『中國近代教育史資料匯編』(同右)；『清光緒朝中日交涉史料』；『學部官報』；『時務報』(時務報館)；『教育世界』雜誌(教育世界社)；『教育雜誌』、『東方雜誌』(商務印書館)；多賀秋五郎『近代アジア教育史研究』上、下卷(岩崎學術出版社、一九六九)；阿部洋『中國近代教育と明治日本』(同右)を參照。
- (8) 「其一至三集、羅(振玉)輯；四至七集、王(國維)輯。」(四集以下)有文三十餘首(篇)、爲『觀堂遺書』中所無。其哲學各書、均觀堂譯述。初集木刻、二、三集石印；四集以下、鉛印洋裝。「(『蝦隱廬新版書目』『教育叢書』出版說明、一九三五年。陳鴻祥『王國維年譜』による)。
- (9) 張之洞の羅振玉宛書簡、『張文襄公全集』卷一七四、電牘五三)。
- (10) 羅振玉『扶桑兩月記』(教育世界社、一九〇二)。